「夢を追いかけて」

ニューヨーク補習授業校　七校　五年二組

豊田　夏樹

「カッキーン。走った、走った。二塁を蹴って三塁へ向かった。おおーっと、ここは、リスクが高いがホームへ走る夏樹選手。二塁の岡本選手、ホームへ一気に投げたぁー。タイミングは、アウトだが夏樹選手スライディング。まだあきらめてない。ホームへ飛びこんだぁー。さあ、審判の判断が、この勝負に決着をつける。もしセーフなら夏樹チームのサヨナラ勝ちのアウトならば、延長戦に突入。審判の判定は・・・。セーフ。おどろくほどの歓声が聞こえます。決勝は、夏樹チームの優勝ー。ウオーーー。そして出たあ。ウルトラウエーブ。」

これがぼくの夢だ。けれど、この夢を実現するために一体何をすればいいのだろう。まずは、練習だ。ジョギング、キャッチボールに素振り等々。からなければいけない練習は、たくさんある。体を鍛え身体能力を高める。大変ではあるけれど、がんばれば、ぼくの野球は必ずや上達するはずだ。が、本当にこれだけでぼくの夢は叶うのだろうか。

この夏休み、ぼくは、家族と日本一の高い山「富士山」に登った。本当は登りたくなかった。九一日山を歩くなんて地獄だ。しかしぼくには、選択の余地はない。しぶしぶ歩き始めた。最初はたいしたことはないと思った。これなら頂上へ簡単に行けると思った。でも、六合目、七合目と進むうちに空気が薄くなり、ぼくはだんだん苦しくなって来た。八合目についた時には、気持ちが悪くてもう一歩も歩けず、山小屋でたおれるように寝てしまった。午前二時、ぼくは、起こされて頂上に向かって登山開始だ。眠くてすしくて涙が出た。でも、ここであきらめるわけには、いかない。頂上はすぐそこだ。ぼくは、三時間かけて、頂上にたどり着いた。その時ぼくは、思った。あきらめてしまっていたら、ここまで来れなかったと。

「夢を追いかけて」

武神　亜弥

大きな声では言えませんが、私は日本のテレビが大好きです。アメリカで同じようなテレビ番組を見たくても、アメリカの番組は日本のものとはちがいます。そういう時、私はいつも、なぜ日本のテレビはアメリカのとは全然ちがうのかとぎ問に思います。

みなさんは、そのように思ったことはありませんか。日本はバラエティー番組やクイズ番組、特に旅行や食べ物に関する番組がたくさんあります。コマーシャルも全然ちがいます。日本のコマーシャルは、人気のある芸能人が出てくるものも多いし、歌を歌うものも多いです。アメリカのコマーシャルは、商品のキャラクターが、ユーモアのある芸をする場合が多いです。アメリカのコマーシャルはとてもおもしろいけれど、日本のコマーシャルの方が、ずっと頭に残ります。

日本人はバラエティーや歌を歌うコマーシャルの方が好きだから、そういう物を放送するのでしょうか。そうだとしたら、アメリカ人は日本の番組やコマーシャルを見たらどう思うのでしょう。

日本人とアメリカ人の好みがちがうからテレビもちがってくるのでしょうか。私は日本人だけど、アメリカで生まれて、アメリカにずっと住んでいます。だけど、日本のテレビが好きです。もしかしたら、アメリカ人も日本のテレビ番組を知れば、おもしろいと思うかもしれません。

日本とアメリカのテレビは色々ちがいますが、一つ共通することがあります。それは、観ている人をわくわくさせてくれることです。また、新聞や本からでは知ることができないような情報が手に入ることもあります。日本のバラエティー番組は特にそう思うことがあります。例えば、中国は世界で一番すいかを生産する国で、すいかの皮で洋服を作る事も

20×20

「奈良薬師寺の千年の釘」

W校　五年二組

竹淵　はな

「薬師寺の釘を食べたよ。」

私は夏休みのある日、祖母と一緒にクミ作りに行きました。何のクミかというと、薬師寺の宝でもある千年の釘と同じ作り方でできたクミです。そうです、私は今年の夏、母の地元の奈良のお寺、薬師寺に行きました。

薬師寺の釘はふつうの釘とは違うのです。ふつうの釘は寿命五十年ですが、この釘は千年以上もった釘です。一つ目の工夫は、ふつう、釘を板などに入れると、釘の周りに空気のまくができます。しかし、あの特別な釘には、木の成分がその空気のまくを取り消して密着するようになっています。もう一つの工夫は、ふつうの釘が木の節を通った時、その節の中央をつきぬけます。けれども千年の釘は節をつきぬけるのではなく、節の周りを迂回して周って止まります。その二つの工夫で

20×20

できると知りました。

テレビは良くないと言う人が多いです。もちろん、テレビを見過ぎると目が悪くなったり、見ているだけで頭を使いません。その点ではよくないと思います。

でも、先ほどの理由から、私は良い点もあると思います。また、テレビにはもう一つ良い点があります。それは、日本へ帰国した時に感じます。帰国してすぐ、時差がつらい時、テレビを観るのです。私の母は、時差がある時、九時まではテレビを見ていいから起きていなさいと言います。そんな時は、テレビを堂々とたくさん見ることができるし、時差も三日くらいでなくなります。でも、アメリカにもどってくると、テレビが面白くないので、テレビを見て起きていることができないので、時差がなくなるのに時間がかかります。みなさんも、次日本へ行く時は、時差ボケを直す方法の一つとして、テレビを見ることを試してみたらどうでしょうか。

20×20

釘を長持ちさせるようになっています。

私が祖母と薬師寺のクミ作り体験に行った時、最初に住職がやってくれたのが、お寺の中の案内でした。案内されている中で、私達は本当の千年の釘を見ました。最初はただのさびた釘だと思っていたけど、これが千年という時を過ごしてきた釘だと思うと感動しました。その他にも、その建物に刻まれている彫刻や模様を案内してくれました。人の手でやったと思えないぐらいきれいでした。見た後は、クミの作成の時間でした。本当の釘は作れないので、住職がクミを釘と同じ作り方で教えてくれました。釘は、鉄の液体を立体の型へ流しこみます。そしてゆっくりとはがします。私達はそういう風に作りました。住職が手でほって作ってくれた型に液体を流し入れました。住職は作り方の歌まで作曲してくれました。それはアナと雪の女王の歌詞をかえたバージョンです。みんなが笑ってしまいました。私はこの体験を通して、釘がどう

20×20

やって作られたかと、グミの作り方が分かりました。私はそんなことを考えた仕職がすごいと思いました。

私がこの体験に参加できた理由は、夏休み前に祖母が新聞で小学生を募集しているのを見て、応募してくれました。そのおかげでこのグミ作りを体験できました。私はこの体験でたくさんのことを習いました。最初には、千年の釘が偶然千年もったと思っていましたが、昔の人が色々な工夫をして作ったことが分かりました。

千年の釘は、人よりはるかに長い時間を過ごしてきたんだなと思いました。教科書にこのお話がのっていたのでうれしく思いました。

20×20

と、しかられます。

練習中は必死で、まさに自分との戦いです。できない小節や音があったら、

「自分のバカ。なんでできないんだ！」

と心の中で言いながら自分の頭をたたいたり、

「ママのバーカ。」

と気づかれない程の小さい声で言ったり、

「こんな曲なんか二度とひきたくない！」

なんてさけんでしまうこともあります。でも母は全くあきらめず、

「いいからひく。」

「ひきたくても、ひきたくなくても、ひかなければならないものはひく。」

と言うので、なんとも言い返せずくやしい思いをしながら、口びるをかんで練習を続けます。練習が終わるころにはもうくたくたです。それでも、練習をしてできなかったことがいっぱいできるようになりました。

毎日毎日練習を続けるのはとてもきびしい

20×20

です。でも練習の成果が出てくると、曲をひくのもだんだん楽しくなっていきます。もっとたくさん練習をして、いつかチャイコフスキのバイオリン協奏曲がひけるようになりたいです。

20×20

バイオリンと私

五年二組　松下　愛理

私は七才のころからバイオリンを習っています。始めたころはほとんど遊びで、練習も楽しくしていましたが、今ではひくのは好きだけれど、練習はイヤでイヤでたまりません。ですが、毎日こつこつ練習を続けることで、ちょっとずつ上達していき、私の「世界で有名なバイオリニストになる」という夢に近づけるように努力しています。

始めたばかりのころの私は、ひきたい時にひく、ひく気分ではない時はバイオリンのことをする、かり忘れて、ほかのことをしていました。でも今はそうはいきません。毎日一時間、鬼のようにこわい母と練習をしています。でも、私は練習がきらいですぐにあきてしまい、四十五分がすぎるころになると、「いつ終わるかな」と時計ばかり見るので母に、「なに時計ばかり見てるの！」

徒競走の神様

W校　五年　三組

戸田　優菜

これから運動会五年生の徒競走。五年一組と三組は赤組で、二組は白組だった。六年生が白い旗と赤い旗をふって応えんしている。

もうすぐ私の番だ。これまでに徒競走では一等になったことがなかった私は、今度こそ一位になりたい気持だった。心臓がドキドキする。

前のグループでは赤が勝った。

私のグループは位置についた。内側から二番目。笛がなるのをじっと待った。

「ピー！」

まずは一番内側のレーンに入り、先頭を走り続けた。もう、前しか見えなかった。横も見なかった。五年生の徒競走は九十メートル、トラックの約四分の三だった。だから、最初は先頭でも、ゴールまで一位で走りぬけられるきょりではない。ずっと全速力で走らないと、一位にはなれない。

アナウンサーは、

「赤が速い！白も負けるな！」

と、ずっとさけんでいた。

もうすぐ生徒たちがいるテントだ。そこからゴールまでは近い。赤組のテントを通った。

「あーか！あーか！」

声が大きすぎてそれしか聞こえない。五年生は後はいが五学年もいる。先ばいは運動会で一学年しかいない。

もうすぐゴールだ。白いひもをつきぬけるまで速度を落としてはいけない。

そして、私はひもを感じた。ゴール！赤が一位で、みんなさけんでいる。保護者の一人が私のむねに輝く「一」とかいてあるシールをはってくれた。

一位とかいてある旗の後ろに立った。うれしかった。

ゴールまで走ったしゅん間、徒競走の神様が私にほほえんでくれた気がした。

私の後のグループも、赤が勝ったグループが多かった。

今年は赤組が大勝利。

徒競走の神様、ありがとう。

ミドルスクーラーになって

W校　五年　三組

バルミエリ　リーアム

ぼくはこの九月から、ミドルスクーラーになりました。ぼくの一才上のお兄さんが、去年からミドルスクールに行っているので、学校の話はたくさん聞いていました。とても楽しそうなので、早くミドルスクールに行きたいと思っていました。

ミドルスクールはロッカーがあります。自分のナンバーのコンビネーションをして、かぎを開けます。時々ナンバーがうまく合わないと、かぎが開かないことがあります。でもぼくはたくさん練習したので、大じょう夫です。ぼくのロッカーは上なので、はじめはせのびをしなければいけませんでした。そ木から授業の物を急いで取って、急いで教室に行きます。三分間で全部のことをするので、けっこう大変です。そ木でれの授業で教室を移動するのは小学校にはなかったので、とても

楽しいと思いました。教科ごとに先生も変わります。ぼくの好きな教科はリーディングとサイエンスです。リーディングは先生達がやさしくて、サイエンスは実験が面白いのと、先生が色々知っていて、たくさん教えてくれるからです。でもミドルスクールは毎日全部の教科から宿題が出ます。テストやクイズもあって大変です。だからこのごろ外で遊んだり、バスケットボールを練習する時間がなくなってきました。それは少し残念なところです。

ミドルスクールは小学校とちがって、自分でやらないといけないことがたくさんあるけれど、それは大変というよりも、楽しいです。まだミドルスクールの一年は始まったばかりだけれど、勉強とスポーツをがんばったり、イベントにもたくさん参加して、楽しい一年にしたいと思います。

20×20

もう戦争は終りのころだったので、食べる物も少く、お腹がすいてとても辛かったと言っていたそうです。母との夕食の時に、ビールを飲みながら「今こうしてビールを飲んで、テレビで野球を見ているのがとても幸せだ。」と言っていたそうです。

とても辛い体験をしたからこそ、今の私達にはふつうに思えることも幸せに感じるのだろうと思います。

もう二度とこのような辛い事が起きないように、ひいおじいさんのような体験を人々に伝えていかなければならないと思いました。

今も世界中で国の利益や、宗教のために戦争をしている国があります。暴力や武力で争いを解決するには、たくさんのぎせいがとてもなうという事を、昔の人々の体験から学んでいかなければならないと思います。

平和のために、私たち一人一人が相手のことを思い毎日生活することが、争いをならないための第一歩だと思います。

20×20

平和になるには

L工校 六年一組

モンターリ 鈴音

六十九年前の八月六日、アメリカは広島に原子ばくだんを落としました。その三日後、長崎にも原子ばくだんが落とされました。数万人の人がすぐに亡くなって、そのあと被ばくした人達も白血病などでたくさん亡くなりました。アメリカが日本との戦争を終わらせて、平和になるために落としたそうです。

私は、これはとても間違った事だと思います。私や世界中の人がもう同じ事が起きないように祈っていきます。この事を知って、私は平和というのはいったいなんだろうと考え始めました。平和になるのは、とても難しく思えます。

アメリカが日本に二つのばくだんを落としたとき、日本はめちゃくちゃになりました。たくさんの人がばくだんのせいで苦しみました。平和はどこにも見つかりませんでした。

20×20

平和

L工校 六年一組

漁澤 真佳

私は今、とても平和に生活しています。健康で、友達や家族に囲まれて、笑ったり泣いたりして生きています。このような平和な暮らしができるのは、昔戦争を体験された方や、ぎせいになり亡くなられた方々のおかげだという事を決して忘れてはならないと思います。

母が私のひいおじいさんから聞いた戦争の辛い体験の話をしてくれました。それは、今の生活からは想像もできないような話でした。ひいおじいさんは、フィリピンの島に出せいし、毎日長い距離のしげみの中を飲まず、食わずで一日中重い荷物や武器を持って歩いたり、時にはアメリカ軍の空しゅうから逃げるために海にもぐったりしたそうです。

ひいおじいさんがフィリピンへ行った時は、

20×20

私は、戦争を終わらせるためには、別の方法が絶対にあったと思います。暴力を使わないで戦争を解決することは、平和になるために大事なことなのに、アメリカは反対のことをやったのです。

私は、アメリカが日本にばくだんを落としたのは、もしかしたらアメリカが日本をよく理解してなかったからかな、と思います。世界で戦争がおきる理由は、おたがいのことをよく理解してないからだと思います。私は、世界が平和になるかぎは、おたがいのことや状況をよく理解することだと思います。

私はどうやったらみんながもっとよく理解できるのか考えました。たとえば、私の住むニューヨークには、いろいろな違う国から来た人が住んでいます。違う国から来た友達は、私に自分の国のことをいろいろ話してくれます。すると私は、友達の国にとても興味を持つようになって、今までよりもっと好きになります。そして、私も自分の国のことを好きになってもらうように友達に話します。こうやっておたがいの国や人のことを知ることができます。私一人では変わらないかもしれないけれど、世界中の人が同じようにすれば、世界は、いつか平和になるかもしれません。

20×20

自分の部屋

NY補習校　W校　六年一組

ビエム　アディア

この夏、私は自分の部屋をもらった。今まで妹と部屋をシェアーしていたけれど、九月から私は中学生になるので、自分だけの部屋をもらうことになった。

夏休みが終わる前に、新しい部屋のかべの色をぬりかえることに決めた。私は「ロッキーマウンテンの空」という名前の、きれいな青色を選んだ。私と母と妹は、仕事に行っている父をびっくりさせようと考え、私はうきうきしてきた。でも、私たち三人は、ペンキぬりをしたことがない。みんなで考えながらやってみた。私と妹は、マスキングテープをドアの回りにはる役をした。床に新聞をたくさんしいた。青いドロッとしたペンキを初めてかべにぬった時、私の心の中は、ジャンプするような感じだった。ロールをゴロゴロさせながら、どんどんかべの色が変わっていくのがおもしろかった。三人で三分の一ずつぬった。ぬり終った時は、夕方になっていた。父が会社から帰って来て、予想通り、

「オオー！」

と言ってびっくりしたので、私達は喜んだ。

次の日はベッドをバラバラにして、新しい部屋に運んだ。私と妹は、ねじをはずしたり、組み立てたりした。これはちょっと難しかった。それから、大きな本だなも三人で運んだ。その日の夜、また父はびっくりした。私は、自分で選んだスタンドライトを、説明書を読んで、自分で組み立てて部屋に置くと、私はうれしくなってきた。父は、私が何んでも自分でできるようになったから、ちょっとさびしそうだった。ペンキのにおいが毎日少しずつ消えていくのを感じた。

私は、自分の部屋が大好きになった。でも大好きという言い方では少しちがう感じがして、ぴったりではない。それを母に言うと、「愛着がある。愛着を持つ」という言葉があ

20×20

小さな平和

W校　六年　一組

木谷　希望

「平和」は相手の立場に立って考えること、相手を認め合うこと、そこから始まるのではないかと思う。そう思ったきっかけは父の一言だった。

「平和」の反対はきっと「戦争」だろう。でも、「戦争」も「平和」も私達の生活の中ではちょっと意識するのは難しくピンとこないので、こんな風に置きかえてみた。「戦争」はけんかすること、「平和」は仲良くすること。

私には二つ下の弟がいるが、私と弟はよくけんかをする。そんな時、いつも父に「おたがいに思いやりを持ちなさい。思いやりがないからけんかになるのだ。」としかられる。では思いやりとはなんだろう。辞書で調べてみると「相手の立場や気持ちを理解しようとする心」とあった。自分のことばかり考えるのではなく、相手のことも考える。もし私が相手の立場に立っていたらどう思うだろう、と考える。まずはそこからはじめることが大切なのだ。父はそう言っているのではないかと思うようになってきた。そしてそこからさらに一歩進んで、その相手の気持ちを理解し認めることできっとけんかもなくなるのだと。

しかし、自分と相手はちがう人間なのだから、相手がどう思っているかなんて絶対に分からないのでは、と思う人がいるかもしれない。その通りだ。しょせん他人の考えていることなんて超能力でもないかぎり分かりっこない。難しい問題だと思う。でもこんな風には考えられないだろうか。友達が面白いよと教えてくれたマンガは面白かった。楽しいよと教えてくれたゲームは楽しかった。では、すこし想像力を働かせ、自分はいやだなぁと思うことを友達はどう思うだろうかと考えてみる。自分がうれしいなぁと感じることを友達はどう感じるだろうかと考えてみる。たぶん答えは自分と同じように思い、感じるのだと思う。相手の考えていることは分からないかもしれないが、自分がそうされたらどう思うか、どう感じるかをもとに想像することはできる。そしてそれがきっと「相手の立場や気持ちを理解しようとする心」つまり「思いやり」なのだと思う。

私はアメリカに来て考え方がちがう色々な人と出会った。はじめのころは少しおどろき、少しとまどった。でも、自分とはちがう考えを持つ友達と話をしたり、そういった友達の意見を聞くことがだんだんと楽しくなってきた。そして、周りの友達も私の意見や考えを楽しそうに聞いてくれていることに気付いた。

この世にはきっとまったく同じ考えを持つ人はだれもいない。一人一人がみんなちがう。だからこそ、相手の立場に立って考え、それぞれちがうみんなの意見を受け入れ認め合っていくことでけんかをしなくなり「平和」に近付いていくのだと思う。

ニュースを見ていると今この時も世界では戦争が起こっている。世界全部を平和にすることは私の力では難しい。でも、私にもできることはきっとある。毎日の父や母や弟との生活の中で、まわりの人達に思いやりを持って接し、みんなの異なる考え方・感じ方を一つでも多く受け入れることで、身近なところから「平和」にしていきたい。そして、世の中の一人一人が皆そうすることによって一つ一つの「小さな平和」がつながって「大きな平和」になればいいと思う。きっといつかそうなると信じている。

20×20

七月二十五日、金曜日。グリーンボイスという高齢者施設で、一つ目のボランティアだ。はじめにホームの人に言われた事は、「まずは来ている方達と話してみてください。三十分くらいはそれで。」

私が一番不得意なのは「話す」事。何か話題があってもできないのに、話題を考えなくてはいけないなら、なおさら無理。私は最初そう思ったが、まずはあいさつ。一歩前に踏み出した。

「おはようございます。」

目が合ったおばあさんにこの一言、そのはずみで、このホームで作ったクラフトなどを見せてくれて、親しみを持ってくれた。次は、机に置いてある紙のそれぞれの名前を覚えて、名前で話しかけてみた。必ず敬語というのを忘れないのも大事だ。年上の人に、つい敬語を使わない事が多い生活だったので、デス・マス等の丁寧語だけは絶対に忘れない様にした。ゆっくりでも距離が縮まった気がした。

20×20

七月二十八日、月曜日。二回目のボランティアはまだ緊張していたが、前よりはずっと気持ちが楽だ。話し方のコツは分かってきたし心配はあまりしていなかった。今回も友達と一緒だから大丈夫。

この日行ったリハビリセンターでは、皆さんと体操をする事に。まずは十時から一時間それを…と思ったら、十一時からもう一回別のグループの人と体操。同じ様な作業を毎日繰り返すのは案外難しいのに加えて、忙しさにも驚かされた。

昼休みを一時間もらっている間、そこで働く人達が休まず働き続けている姿を見て、一生懸命さが伝わってきた。それをありがたそうに見てるお年寄りの方達が、ここに来たくなる気持ちが分かってきた。こんな頑張ってくれるなら嬉しいし、行く気も上がるはず。

最後に月別のお誕生日会が行われた。こういう会を開く事でお互いの大切さが分かる良い企画だと思った。だから、こんなに皆が笑顔

20×20

ボランティアから習った祖母の心

L I 校　中等部一年一組

山口　百音

今年の夏休み、私は祖母と過ごす為に一カ月半ほど日本に行っていた。一年ぶりに会った祖母は、あまり変わった様子はない感じで元気そうに見えた。しかし、一つだけ変わっていたのは、週に二回、リハビリセンターに通い始めた事だ。そこに行くと色んな人と話したり、足の筋肉を鍛えたりすることができると嬉しそうな祖母に、私はとても驚いた。

そんなに良い場所なのか、私には分からない。でも祖母が言うのだから、間違いなさそうだ。

その時、私は今度友達と一緒にボランティア体験に行く事を思い出した。高齢者施設でもボランティアできるはずだ。そこで、祖母が言った事が何か分かるかもと思い、三カ所申し込んでみた。

一週間経って、ボランティア先が決まった。選んだ三つは参加できる様で、ほっとした。

20×20

なのだと私は感じた。

七月二十九日、火曜日。ついに一人だけで申し込んだボランティア。そして、この夏最後のボランティアでもあった。耳の聞こえにくい人と筆談ボードを作って会話するのが仕事だった。これまでに比べて簡単そうで、ボード作りは図工の授業に似た感覚だった。ボードでコミュニケーションをする時、絵や文字で会話を表現できた事は、お互いにとって気持ちが良い事だった。

元々ボランティアは手伝い等をするものだと思っていた。でも、結局は人間関係作りが大切なのだと思えてきた。どこのボランティアに行っても必ず「話す」事は必要だった。よく考えてみれば話さないと何も始まるはずもないし、何も進まない。

その時、気づいた。祖父が亡くなってからは一人暮らしをしている祖母。おしゃべりが大好きなのに、家には話し相手がいないのだ。

のバランスを取っているのだと、私は思った。

外出の時には、髪形や洋服も気にして、オシャレにして出かける。こんなささいな事でも、祖母にとってかけがえのない時間なのかもしれない。昔は、好きな時に友達に会えた祖母が、今は一人で出かけるのが難しい。この大きな違いが生まれていたのだ。

何歳になっても他人との交流は大事なのだと私は気が付く事ができた。いつもは頑張っても会話を続ける事が苦手な私が、一歩自分で踏み出した事で、多くの事を知る事ができた。

初めての魚釣り

LI校　中等部　一年一組
山口　茜

夏休み最後の週、私は家族で初めて魚釣りに行った。私にはひとつ不安があった。それは、天気である。空は灰色で、風もけっこう強い。よく見ると、海の波は荒くなっている。

船が動き出した。私は、気合を入れて、船の手すりにしっかりつかまった。「絶対、魚を釣ってやる。」沖に向かって約一時間。船はゆっくり止まった。船に乗ったばかりなのに、もう海の潮水としぶきでびしょぬれだ。雨は、まだ降っていなかったが、今にもザーッと降ってきそうなほど、空はほの暗い灰色だ。どこからか大きな音がした。自分の周りで皆がとうとう釣りを始めた。私もあわててエサを二つの釣り針に引っ掛け、海に向かっておもりを落とした。さおのおもりは、みるみる深い海へと落ちていった。私は、糸を止め、さおを持って魚がかかるのを待ち始めた。

何秒たっただろう。くいっと何かがさおを引っ張っているように感じた。「あっ、これ、もしかすると?」私は必死にリールを巻いた。しかし、私の釣り針に引っかかっていたのは魚ではなかった。エサだけ食い逃げされたのだ。悔しくてたまらない。周りを良く見ると釣りが上手な人は、まだ早い時間なのに、もう何匹か釣り上げている。

船はまた動き出し、止まり、乗客は、新しい釣り場でさおを投げ始めた。私は、一匹も釣れない状況に少しあせりだし、半ばやけになったような気持ちで、さおにえさをつけて、じっとさおの動きを見ていた。少し糸が動いたら、すぐさま引っ張り上げた。しかし、一匹もかからない。

「なぜうまく魚がかかる人と、かからない人がいるのだ」と思って、私は、たくさん魚を釣っている上手な人を観察した。そして、新たなことを学んだ。つりのコツは、忍耐だということ。あせらず、じっと待つことだ。

さおを持っている感覚が変わった時に引き上げるタイミングが大事なのだ。

この新しく学んだコツを使って、忍耐強く魚がかかるのを待っていると、四匹も釣ることが出来た。すべてシーバスだ。この中の一匹は、家に持ち帰れる大きさだったので、バケツに入れた。中でぺたぺたとヒレを動かしている。この頃私は、もう初心者から中くらいの名人になるコツをつかめていた。空からは、ついに雨がぽつぽつと降り始めた。

私は、父と、弟と一緒に釣りを続けながら、デッキに立って空を見上げていた。海の波は、ますます荒くなっていて、時には、船が大きく揺れて、一瞬飛んだように感じた。すると、さおに何かが引っかかった。私は、ドキドキしながらリールを巻いた。あせったせいか、なかなか早く巻けなかった。かかっている魚は大きい、と思いながら、がんばってリールの糸をすべて巻き上げた。釣り針に掛かっていたのは、正真正銘の魚だった。しかしその魚は、奇妙な茶色とオレンジで、なまずのようなひげがあった。船のスタッフのお兄さんが、この魚を私の針から外し、また海に放り投げた。後から、弟が「あの魚は、釣っていい魚のリストに入っていなかったからだよ」と教えてくれた。それで、私は魚釣りには守るべきルールがあることを知った。

雨がザーザー降り出した。私、弟そして父の他には誰もデッキに出ていない。皆、船の中に入っている。私は手すりにつかまって、弟と共に、「うわあ」と海に向かって叫んだ。私たちの声は、強烈に吹きすさぶ風と大粒の雨の音の中で消えて行った。

嵐の中、上下に大きく揺れる船に乗っていることが、なぜか気持ちよくなってきた。弟と海と風に向かって、雨の音に負けないくらいの大声を出した。まるで自然と対話をしているようだ。大雨に打たれながら、「こうなったら、とことんやるぞ」というような大きな気持ちで、向かってくる雨と風と波に打たれながら、デッキで倒れないようにしっかり手すりにつかまっていた。弟を見ると、ずぶぬれで嬉しそうに「やったあ。最高」と叫んでいる。二人で大きな声を出しているうちに、暗い雨が、ほえる様に激しくなってきた。その反面、私の心の中は、雲がぱっと散ったかのようにすっきりと晴れていた。

港が近づき、釣りの時間の終了も間近になった。結局釣れたのは、三パウンドくらいのシーバス一匹だった。しかし、私にとって収穫はそれ以上であった。何でも一度経験してみないと分からない、という感覚だ。そして、次に魚釣りをする時は、リールの巻き方や引くタイミングなど工夫してみようと思った。

港に着いた時は、沖で釣りをしていたときとは違い小雨になっていた。私は冷えた身体で少し疲れていた。でも胸の中は、何かやり遂げたような、達成感に満ちていたのだ。乾いた服に着替えたときには、雨上がりのような晴れやかな気持ちになっていた。

奇跡の四ヶ月

W校中学一年一組

加藤和樹

お父さんと同じような革靴をはいて、強く輝くH学園のバッジをつけて、僕はバスから降りた。まだ四月の中旬で、所々に雪の塊が残っていた。息を吐くと、白いけむりが、雲一つない、どこまでも続く青い空へとまい上がっていく。青々とした森の中で立つ僕の目の前にはH学園中高学校スコレー合宿旅館と書いてある大きな旅館があった。受験して入学してから二週間、クラスの絆を深めるための、長野県にある旅館で合宿は行われるのだ。このスコレー合宿は、一生忘れられない僕のH学園生としての四ヶ月の始まりだった。

スコレー合宿はグループごとに別れて活動することが多かった。生活班というのもあり、三泊四日の合宿の間はその班の仲間たちと同じ部屋で寝た。僕が広尾で初めて作った友達

のひとり、そして今では一番の親友、ショウキは同じ班だった。他の四人も入り、その班ではスポーツやバズドラの話をしたり、夜遅くまでギャーギャーとさわいで先生に怒られたりして、たった二週間前に出会った人たちとは思えないほど打ち解けていた。生活班の他には、活動班というものがあり、グループに別れ活動する時の班だ。活動班は出席番号順だったのでショウキはいなかったけれども、すごく明るくて面白いアヤカという子に出会った。僕とアヤカと班にいる他の四人は、チームワーク抜群だった。与えられた課題はどの班よりも先にこなすことができた。一番大きな課題はクラス目標を決めることだった。結果的に僕たちの班が出した、「ＳＭＩＬＥ」になった。

スコレー合宿の三日目に、みんな勉強から休みを取り、五十メートル走を測ると先生が発表した。旅館の横にある大きなグランドで測った。僕はこういう競争やレースが得意で大好きだったので、待ち切れなかった。僕の出番がくると、出来るだけ落ち着いて集中してクラウチングスタートへ入った。前しか見ずに、自分の心臓の音が聞こえるほど耳を澄まし、集中した。先生が旗を上げ、下げた瞬間に踏みきった。最高のスタートでそのまま加速していった。砂埃を抜け、グランドに引いてあった白い線を思いっきりふんだ。先生はタイムウオッチを止め、笑っていた。「七秒一二。」と先生は言った。自分でも驚いた事に学年一位で、あとちょっとで六秒台だった。僕は今まで何かで学年一位になったことがなかったので、とてつもなく嬉しかった。

けれども、三泊四日はあっという間だった。もう帰る日が来て悲しかったけれど、スコレーを離れるだけで、みんな離れるわけじゃないし、これから三年間ずっと同じでクラスで一緒にいられると思い、前向きに考えた。だけど僕は間違っていた。

悲劇は突然訪れた。八月十三日、僕はアメリカへ引っ越す事へなった。スコレー合宿から四ヶ月、僕は合宿以外にもたくさんの思い出を作った。スポーツフェスティバルでアンカーとなり、みんなの思いがこもったバトンを受け取って走った時。東京ディズニーシーに三回も行き、ショウキとアヤカと他にも二人でタワーオブテラーでさけびまくった時。同じくディズニーメンバーで東京や浅草探検をした時。自殺ダッシュを一日二十回やらされたきついバスケ部の合宿。他にもたくさんあるが、全部昨日のことのようにはっきりと覚えてる。アメリカへ帰ると聞いた時、僕は「何のための受験だったんだ。」「何のための苦労だったんだ。」とどなった。けれども今考えてみると、苦労して受験しなかったら、こんなにいい思い出も作れなかったし、逆に帰る事になったから、今までの思い出もより楽しく感じられたのかもしれない。

八月十三日、羽田空港まで二時間半かけてまで、ショウキ、アヤカ、そして同じバスケ部だったソウマとカズマが見送りに来てくれた。僕の目から思いもかけず滝のような涙が流れた。

「みんなに出会えてよかった。」

もちろんこれはさよならではない。いつか必ず僕は日本へ、いや、Ｈ学園へ戻る。「サヨナラ」ではなく、ただの長い長い、「またあとでね」だ。